

無助詞文の分類と段階性

黒崎 佐仁子

キーワード

無助詞・助詞の省略・対比感・主題の重複・新しい話題

1. はじめに

日本語の話しことばの中には、書きことばにはない特徴^{注1}がいくつか見られる。その中の一つが、係助詞の「ハ」や格助詞の「ガ」「ヲ」が現れない現象である。本稿では、書きことばであれば助詞があるはずの位置に、何もない場合、これを「無助詞」と呼び、無助詞を含む文を「無助詞文」と名付け、この現象はごく自然なものであり、決して誤用などではないと考える。しかしながら、日本語非母語話者を対象に行われている現在の日本語教育では、自然な日本語の習得を目標に掲げていながらも、例えば、日本語教科書『A COURSE IN MODERN JAPANESE』に「You are advised not to omit any particles while you are trying to learn to speak Japanese.」とあるように、助詞が現れない現象を積極的に認め、取り上げていこうとはしていない。そこで、本稿では無助詞文を日本語教育に取り入れるべきだという立場に立ち、その一步として無助詞文の分類と特徴について考察していきたい。

2. 先行研究 ―助詞の省略と無助詞の関係―

これまでの研究には、「助詞がない」ことに対し、単なる助詞の省略とするものと、もともと助詞は存在せず、他の助詞に相当する機能がそこにはある、と捉えるものがあった。以下、それぞれの研究がとっている立場別に先行研究をまとめる。

2.1. 助詞の省略とする立場

「助詞がない」ことを助詞の省略であると捉えるものには、久野（1973）、Tsutsui（1984）、筒井（1984）、藤原（1992）などがある。久野（1973: 223）は、「主文の主語をマークする「ガ」は、会話文でも省略することができない。主文に助詞を伴わないで現れる主語は、全て「ハ」の省略である」としている。久野は、「僕^{注2}コノ本^{注3}買ッタ。」のような例文を出し、「ヲ」の省略を認めている。しかし、同じ格助詞であるにもかかわらず、主文の主語の「ガ」には省略はない主張する。また、「ガ」を使った場合、総記^{注3}の意味合いが強くなるように、「ハ」を使って、「僕^{注2}コノ本ヲ買ッタ。」「僕^{注2}ゴハンガ食ベタイ。」とした場合、対照^{注4}の意味合いが強くなることについて全く触れていないのは問題である。

Tsutsui (1984)、筒井 (1984) は、「ハ」「ガ」「ヲ」の省略が存在するとして、それぞれの省略条件を個別に論じている。甲斐 (1991) は、「確定の原則」、「聞き手への配慮の原則」を提出し、省略のされやすさの段階性について述べている。藤原 (1992a) (1992b) は、「随意的な助詞の省略」「義務的な助詞の省略」の2種があるとし、「義務的な助詞の省略」が「もともと助詞が存在しない」ことになるのかについては、今後の課題にすると述べている。

2.2. もともと助詞が存在しないとする立場

「助詞がない」のは、「もともと助詞が存在しないのだ」とする立場をとっている研究がある。ただし、これらは、省略とは捉えられない「助詞がない文」について論じたものであり、加藤 (1997) を除けば、助詞の省略については何も言及していない。尾上 (1987) は、「主語にハもガも使えない文」を3タイプに類型化している。この類型は本稿の示す分類に非常に重なる部分が多い。しかし、尾上は類型化に留まっており、なぜハもガも使えないのかについては、ほとんど述べていない。楠木 (1990) は、特に疑問文に注目し、「焦点化されたガ格句を中立化する機能をもつものとしてゼロ格の存在を認める」としている。樋口 (2000) は、現場指示用法の指示詞を含む無助詞文を、項構造を用いて説明しようとしている。以上の研究に対し、加藤 (1997: 35) は「本稿では助詞が省略されているという見方を便宜上いっさい排除することにした。理由は簡単である。両者を区別する必要がないからである。」と述べ、はっきりと省略の存在を否定している。そして、無助詞は脱焦点化機能ですべて説明できるとしている。

2.3. 「省略」の場合と「もともとない」場合の両方があるとする立場

松下 (1928) は、まず「題目」と「平説」を分けた上で、「ガ」「ヲ」のない平説の存在を認め、更に題目を分説、合説、単説に分け、「あの人 ϕ 幹事です」のような文は「分ける意味も合わせる意味もない題目は単説である」と説明している。丹羽 (1989) は、「 ϕ 」は主題から、主題を表さずそれ自体の機能を持たない、つまり格助詞の省略といってよく場合への連続を持つ」とし、その違いを語順によって説明している。長谷川 (1993) は、「単なる格助詞の省略を表す「 ϕ 」と「独自の機能を持つ「 ϕ 」の両方があるとし、この独自の機能とは、「取りだし」であるとしている。そして、更に「取りだし」を、聞き手の注意を喚起する「信号性」と対比性や排他性を避けるために取り出す「やわらげ」に下位分類している。大谷 (1995) は、助詞の省略を認めながら、そのうち、いずれの助詞も使うことができない文について情報の新旧及び対話における知識管理という観点を用いて論述している。

2.4. 本稿の立場

本稿では、「省略」の場合と「もともとない」場合の両方があるとする立場をとるが、丹羽 (1989) と同様に、これらには段階的な連続関係があると考ええる。しかし、ここでは便宜上、助詞の復元が可能であり、更に助詞があっても不自然でない場合を「省略」と呼び、助詞の復元が不可能な場合や、助詞がないほうが自然である場合を「無助詞」と呼ぶことにする。

3. 助詞省略の許容

どこまでが助詞の省略で、どこからが無助詞であるかをはっきりと定めることは難しい。そこで、まず本章では、助詞の省略はどの程度可能なのかについて考えていくことにする。

本稿の分析対象は話しことばであるが、助詞の有無を人間の聴力で判断するには限界がある。そこで、本稿では分析資料にテレビドラマのシナリオ^{注5}を用いることにした。シナリオを選択したのは、自然談話ではないが、シナリオは日本語母語話者が意識して自然な話しことばを記述しようとしたものであり、母語話者の持つ規範文法を導き出すには有効だと判断したためである。

3.1. 「ハ」の省略

係助詞の「ハ」に、対比的な意味があることは、既に多くの研究で述べられている。ここでは、「ハ」を対比感の有無によって主題と対比に区別するが、本稿の示す対比感とは、野田（1996:210）に「対比の相手は、典型的には、このように、同類の名詞が、肯定・否定で対立する同類の術語と結びついたものである。」とあることから、「肯定・否定で対立する同類の名詞句の想定の上のされやすさ」であると定義する。また、主題と対比の区別は、野田（1996:211）の示す条件に従うものとする。

「は」が対比的な意味をもちやすい条件としては、次の1)～4)の4つにまとめられる。

- 1) 「は」がついた成分の位置—述語に近い位置におかれている
- 2) 「は」がついた成分の種類—基本語順で述語の近くにある成分
- 3) 「は」がついた名詞の種類—対になる名詞が思いつきやすい
- 4) 「は」がついた成分の発音—強く高くゆっくり発音される

これらの条件に当てはまる対比の「ハ」は、省略すると、対比感が消失する。つまり、対比の「ハ」は、省略が不可能である。

「ハ」省略不可の条件1 対比を表す「ハ」は省略ができない

- (1) [夫が脳死した。臓器提供を求められた妻が言う。]^{注6}

まだ心臓 (ハ/* ϕ)^{注7}動いています。 (リ)

これに対し、主題の「ハ」は、省略が可能である。

- (2) [殺人事件の捜査をしている新人警察官が事件に対する疑問を口にする。]

多田さん (ハ/ ϕ)、なぜご主人を裏切ったんでしょう？ (ケ)

「ハ」省略不可の条件2 「恒常的な出来事や客観的な事実を説明する文」

の「ハ」は省略ができない

- (3) [弁護士がゴミ処理場建設反対の署名を見て言う。]

市民運動 (ハ/* ϕ)、住民が一丸となった時に初めて意味を持ち、力を発揮するのです。 (合)

3.2. 「ガ」の省略

「ガ」には、主体を表す用法と対象を表す用法がある。しかし、「ガ」の省略に関しては、この用法による違いではなく、久野（1973）や野田（1996）の指摘する「ガ」の「排他性の有無」が関わっていると考えられる。本研究では、野田（1996: 238）に従い、次のような条件から排他性の有無を決定することにする。

排他専用の「が」が使われるのは、次の（ア）と（イ）の2つの条件をみたす文だと考えられる。

（ア）2つ以上の候補を比較して選択する文になっている

（イ）「が」がつく成分が、主格的な性質をもっている

（ア）の条件は、（中略）「～のほうが……。」や「～がいちばん……。」の形で、強い排他を表す文になっているという条件である。

以上の条件を満たす排他性を持つ「ガ」は、省略が許されない。

「ガ」省略不可の条件1 排他を表す「ガ」は省略ができない

（4）〔産業廃棄物処理業者社長が、村役場で村民たちに説明をしている。〕

あの土地は正規の手続きを踏んで、莫大なカネを払って、オレ（ ガ／* ϕ ）
買い取ったんだ。 （合）

これに対し、排他性を持たない「ガ」は省略が可能である。

（5）〔医師の携帯電話に娘から電話が掛かってきた。医師が娘に言う。〕

今、手術（ ガ／ ϕ ）終わったところ。 （リ）

しかし、排他性を持たない「ガ」であっても、以下のような場合には、省略が許されない。

「ガ」省略不可の条件2 連体修飾節の中にある「ガ」は省略ができない

連体修飾節に現れる「ガ」は、省略することができない。

（6）〔会社の顧問弁護士が、相手側の弁護士に事件から手を引かせる方法を社長に説明している。〕

弁護士（ ガ／* ϕ ）慈善事業ではないことを、彼も弁護士なら当然身に染みて分かっているはずです。 （合）

「ガ」省略不可の条件3 「存在を表す平叙文」の「ガ」は省略ができない

（7）〔会社の顧問弁護士が、相手側の弁護士を下ろす方法を会社社長に説明している。〕

私の同期で、今、横浜のダイオキシン訴訟の原告側代理人をやっている男
（ ガ／* ϕ ）います。 （合）

（8）〔頼みごとをするために、地図を広げ場所を説明している。〕

村の西のはずれに、小さな池（ ガ／* ϕ ）ある。 （合）

ただし、これは具体的な事物の存在を述べる場合のみであり、抽象性の高い物事の存在を言い表す場合には省略が可能となる。

（9）〔ニュース番組の新米記者がスクープ映像を撮ってきた。その映像をニュースで流すというプロデューサーに対し、記者が言う。〕

一つだけお願い（ ガ／ ϕ ）あります。 （ス）

- (10) [村長は親しい役場職員に対して一緒に東京へ行って貰おうと話を始める。]
あ、そうそう、でさあ、実は君に頼み (ガ／φ) あるんだ。 (合)
また、「～ことがある」「～ことがない」の形で表される経験の存在を表す平叙文でも「ガ」は省略が可能である。
- (11) [村長が親しい役場職員に対して、一緒に東京へ言ってほしいと言う。]
オレなんか自慢じゃないが、地下鉄にも乗ったこと (ガ／φ) ないから。 (合)
- (12) [三人で話をしている。一人がある単語を言うと、別の一人が「何それ?」と反応した。これを聞いて最後の一人が答える。]
聞いたこと (φ／ガ) ある。 (リ)

3.3. 「ヲ」の省略

「ヲ」には、対象を表す用法、移動の場所を表す用法、移動の起点を表す用法があるが、いずれの場合も、「ヲ」は省略が可能である。

- (13) [村役場を訪れた村民が、役場職員に対して言う。]
署名 (ヲ／φ) 集めて来た。 (合)
ただし、次のような場合には、「ヲ」は省略できない。

「ヲ」省略不可の条件 強調を表す「ヲ」は省略ができない

- (14) [村民が暴力によってゴミ処理場建設を止めさせようとしている。村長は裁判で解決しようと提案するが、村民は「無理だ」と言う。これに対し村長が言う。]
ここはオレ (ヲ／*φ) 信じてくれ。 (合)

3.4. まとめ

以上見てきた結果を、表にまとめると次のようになる。

表1 助詞省略

	省略可	省略不可
ハ	○	1. 取り立て 2. 恒常的な出来事や客観的な事実の説明を表す場合
ガ	○ (抽象的な物事存在を表す場合)	1. 排他性が強い場合 2. 連体修飾節の中にある場合 3. 具体的な事物の存在を表す場合
ヲ	○	1. 強調している場合

○は、特別な条件のない場合、つまり無標を示す。

4. 無助詞文の分類

助詞の復元が不可能な文や、助詞がないほうが自然な無助詞文が出現するためには、無助詞文が発話される以前に何らの前提も存在しないという条件が必要になる場合がある。

これは、先行する発話が影響し、対比や排他性が加えられやすくなるからだが、本章では先行する発話による影響を受けていないという条件付けの下で無助詞文の分類を試みる。

本章で提示する無助詞文は、次の7種に分けられる。

1. 聞き手の情報を求める文
2. 聞き手への要求を表す文
3. 話し手、聞き手が主題の文
4. 眼前の事象について述べる文
5. 現象描写文の疑問文
6. 特別な表現
7. 新しい話題の新規導入文

4.1. 三上章の構文論

無助詞文の分類及び出現理由について考察する前に、本研究の基礎となる三上章の構文論についてまとめる。

三上(1960:24)は、係助詞、格助詞の違いについて以下のように述べている。

係助詞「ハ」は係助詞の名にそむかず、大きくはたらいて文末に達しますが、格助詞「ガ」「ヲ」「ニ」などは、顕在のも潜在のも、動詞や形容詞の語幹まで掛かって役目が解消し、それ以上文末に達する余力を持ちません。(中略)簡単に、

「ハ」は大きく大まかに係る。

ガノニヲは小さくきちんと係る。

と言い分けておきましょう。

つまり、日本語は「ガ」「ヲ」「ニ」等の格助詞を含む部分は全体で述部を形成し、その上に「ハ」という題目が置かれる題述関係で文を構成しているのである。

4.2. 文単位からの分類

4.2.1. 聞き手の情報を求める文

「聞き手の情報を求める文」とは、話し手が聞き手に能力、知識、所有、嗜好、経験、聞き手の行為の完了等を尋ねる文である。

- (15) [バスの中で高校生が友人に大学入試試験の過去問を見せながら言う。]

なあ、これ (ϕ / *ハ / *ガ /)、わかる? (ケ)

- (16) [弁護士探しをしている村長と役場職員だったが、上手く引き受けてもらえず落胆している。今日はもうあきらめようということになって、村長が言う。]

どっか、いいホテル (ϕ / *ハ / *ヲ) 知ってる? (合)

- (17) [旅行先で、シャワーを浴びようと思ったが石鹸を持ってくるのを忘れてしまった。友人の部屋をノックしながら言う。]

柴田 せっけん (ϕ / *ハ / *ヲ) 持ってねーか (継)

- (18) [コーヒーをいれながら友人に尋ねる。]

ミルク (ϕ / *ハ / *ヲ) 入れる? (ビ)

- (19) [小売店の娘が客の友人に尋ねる。]

ねえ、ニコちゃんストアー、行ったこと (ϕ / *ハ / *ガ) ある? (合)

- (20) [図書館司書が親しい利用者に声を掛ける。]

『岩窟王』 (ϕ / *ハ / *ヲ) 読破? (ビ)

本稿は、無助詞文の出現理由を、主題の重なりという点から分析する。久野 (1973:30-31) が以下のように述べているように、一文の中で最も述語から遠くにある名詞句、つまり最も文頭に近い名詞句は主題として捉えられる。しかし、それ以外の名詞句に「ハ」が付く場合、それは対比として捉えられる。

もし一つの文の中に、二つ或いは、それ以上の「ハ」が現れる場合には、最初の「ハ」だけが主題を表し、残りは対照を表す。

「聞き手の情報を求める文」は、「あなた」「おまえ」「君」のような聞き手を表す名詞句が顕在化していなくとも、文の主題が聞き手であることは明らかである。しかし、疑問文の場合、主題は聞き手であると同時に、聞き手に関する「何か」でもある。例えば、「ミルク、入れる?」の場合、聞き手の嗜好について尋ねているため、主題は「あなた」であるが、同時に聞き手の嗜好の対象である「ミルク」でもある。

便宜上ここで、省略されている聞き手を表す名詞句「あなた」を復元して考えることにするが、「あなた」「ミルク」という名詞句二つが存在した場合、聞き手は必ず「(あなたは) ミルク、入れる?」の語順で認識する。そのため、「ミルク」という名詞に「ハ」を付けた場合、「あなた」よりも述語に近い位置にある「ミルク」には対比感が生じる。これを回避するため、「ミルク」には何も助詞を付けない、つまり無助詞が選択される。

4.2.2. 聞き手への要求を表す文

「聞き手への要求を表す文」は、聞き手に対する命令及び要求を表す文である。そのため、主題は聞き手になる。しかし、それと同時に「話し手が聞き手に対して要求する何か」が主題であるとも捉えられる。

- (21) [飲み屋で店員に向かって言う。]

ビール (ϕ / *ハ / *ヲ)、もう一杯。 (合)

- (22) [車でファミリーレストラン来た。しかし、店を出ると雨が降っていた。それを見て恋人に言う。]

鍵 (ϕ / *ハ / *ヲ) 貸して。 (ビ)

- (23) [既に一泊しているホテルのフロントでマネージャーが客に言う。]

出来れば、お支払いの方 (ϕ / *ハ / *ヲ)、前金でお願いしたいんですが。 (合)

「聞き手への要求を表す文」では、顕在化されていない聞き手を表す名詞句と要求されるもの「ビール」「鍵」「お支払いの方」等が、主題として重なり合うため、語順の関係から要求される物を表す名詞句に対比感が生じやすく、それを回避するために無助詞が選択される。

「鍵 ϕ 貸して」の場合、「あなた」は顕在化していない、つまり話し手、聞き手の認識の

中にだけ存在する。そして、もう一つの主題「鍵」は顕在化しているが、「あなた」「鍵」が認識の中で二重主題となり、述語「貸して」に近い「鍵」に、「ハ」が付加されると対比感が生じる。この対比感を回避するため、無助詞が選択される。

4.2.3. 話し手、聞き手が主題の文

4.2.3.a. 話し手が主題の文

話し手自身を表す名詞句が主題となる文では無助詞が選択されやすい。

(24a) [「トイレのスリッパで、表に出るのは良くないな」と客に咎められた娘が言う。]

私 (ϕ / *ハ / *ガ), よくやるんですよ。 (合)

(25a) 【酔っ払ってトイレから出られなくなった男が独り言で言う。】

俺 (ϕ / *ハ / *ガ) カッコワリイ…… (ビ)

これらが無助詞文となるのは、仁田 (1991:27) が、次のように述べているように、主題が話し手自身であることが明らかなためである。

現さなくても了解可能な主体を、敢えて表層の表現形式に表現することによって、主体は、対照や排他特立の意味を帯びることになるものと思われる。

話し手自身が主題であり、他人のことについては一切述べない、つまり、主題に対比や強調の意味を全く付加しない場合、一人称詞は顕在化する必要がない。

(24b) よくやるんですよ。

(25b) カッコワリイ……

しかし、敢えて顕在化させる場合、話し手を表す名詞句に「ハ」が付く対比感が生じる。そのため、この対比感を回避するために、無助詞が選択される。

例えば、「私 ϕ 、よくやるんですよ。」の場合、「私」という話し手自身を表す名詞句は顕在化される必要がない。そのため、敢えて顕在化させ、「ハ」を付加すると対比感が生じる。これを回避するために無助詞が選択される。

また、話し手自身を表すのは決して一人称詞に限らない。また、「話し手が主題文である文」が無助詞文になるのは平叙文だけではなく、疑問文でも同様である。

(26) [夕食に気になっている女性が来ると聞いた兄が妹に聞く。]

お兄ちゃん (ϕ / *ハ / *ガ), おかしくないか? (ビ)

4.2.3.b. 聞き手が主題の文

(27) [小売店を営んでいる家に客が泊まりに来た。客は、店の娘が一人で家のことを切り盛りしていると聞き、娘に言う。]

あんた (ϕ / *ハ / *ガ), 偉いね。 (合)

(28) [ニュース番組のキャスターを下ろされ、新キャスターになって初回が高視聴率だった。テレビ局の廊下で、視聴率を褒められた元キャスターが言う。]

……上野くん (ϕ / *ハ / *ガ 、オンエア ϕ 、見てないんだ。 (ス)

「聞き手が主題の文」も「話し手が主題の文」と同様に、聞き手を表す名詞句を敢えて顕在化させる必要がない。そのため、聞き手を表す名詞句を顕在化させると、「ハ」に対

比感が生じる。そこで、無助詞が選択し、対比感を回避が必要となる。ただし、命令・禁止・依頼のような聞き手に対する働きかけの強い文の場合、聞き手を表す名詞句は主題と言うよりも呼びかけとして認識される。しかし、働きかけの弱い文の場合、例えば、上記の例のような感想を表す場合には、話し手がわざわざ聞き手に再度呼びかけを行う必要性は見られず、やはり主題として捉えるべきだと思われる。

4.2.4. 眼前の事象について述べる文

4.2.4.a. 現象について述べる文

(29a) あっ、この時計 (ϕ / *ハ / *ガ) 止まってる。 (甲斐 1991)

(30a) ギャー、この人 (ϕ / *ハ / *ガ) 死んでる。 (樋口 2000)

眼前の事象を述べる文は、樋口 (2000) がこれだけを取り上げて分析をしているように、先行研究においても無助詞文の典型としてよく取り上げられている。樋口 (2000) は、述部が動詞の文を「気がつき動詞文」、形容詞の文を「気がつき形容詞文」と名づけ、別々に分析を行っているが、本稿でもこの二者は分けて扱いたい。本章の「a. 現象について述べる文」は樋口の「気がつき動詞文」に大部分が重なり、「c. 感想・感覚を述べる文」が「気がつき形容詞文」に大部分が重なる。しかし、樋口は動詞が「～ている」の形だけを分析対象にしているが、本稿は動詞の形による限定は行わない。

(29a) (30a) の例は、話し手が、眼前の現象への気付きを思わず口にした発話となる。これらは、現象描写文と似ているが、甲斐 (1991)、樋口 (2000) が指摘するように、指示詞を伴わない場合には現象描写文として「ガ」の付加が自然になるが、指示詞を伴う場合には「ガ」の付加は不自然になる。

(29b) あっ、時計ガ止まってる。

(30b) ギャー、人ガ死んでる。

(29b) (30b) のような文は、その現象が存在している状況全体をそのまま描写しているのに対し、指示詞を伴う文では、状況全体の中から「この時計」「この人」を取り上げ、主題化している。これは、指示詞の指示という機能に、名詞句の含まれる集団の中から一つだけを特別に取りあげる、または限定するという機能があるからである。

また、眼前の事象について述べる場合、「あっ、止まっている」「あっ、死んでる」のように述部のみで表現することも可能である。そのため、敢えて「この時計」「この人」を顕在化させた場合、「ハ」には対比感が生じやすくなり、対比感の回避が必要となり、無助詞が選択される。

「現象について述べる文」には、(29a) (30a) のように聞き手を意識していない独り言のような文だけでなく、聞き手を意識し、話し手が聞き手に、「話し手の気付きを伝える文」や「聞き手へ気付きを促す文」も含まれる。

(31) [倉庫の中に入って捜査をしていると、入り口の扉が閉まってしまった。開けようと思ったが全く動かない。]

これ (ϕ / *ハ / *ガ)、こわれてるんですよ。 (ケ)

(32) [靴屋の前を通りかかり、ショーウィンドーを見て、一緒にいた友人に言う。]

あれ、ここ (ϕ / *ハ / *ガ)、ディスプレイ変わったね。 (ビ)

また、「眼前の事象を述べる文」は、必ずしも「指示詞＋名詞句」を主題に持つものに

限られてはならず、話し手、聞き手の両者にとって明らかであり、更に顕在化されなくとも、主題が何であるかが分かる場合には、無助詞が選択される。

- (33) [ゴミ処理場建設に反対する村民がバリケードを作っている。村民の一人がトラックターの上から様子を伺いながら仲間に言う。]

奴ら (ϕ / *ハ / *ガ) 動かないね (合)

「眼前の事象について述べる文」は、話し手、聞き手にとって眼前の事象が主題であることは明らかであり、顕在化する必要性はない。しかし、敢えて顕在化する場合、対比感の回避が必要になり、無助詞が選択されるのである。これは、「a. 現象について述べる文」に限らず、「b. 対象物の説明をする文」「c. 感想・感覚を述べる文」においても同様である。

4.2.4.b. 対象物の説明をする文

話し手が聞き手に渡そうと思っている物を聞き手の前に差し出し、その説明をする場合にも無助詞が選択される。この場合、話し手の「聞き手の前に物を差し出す」という行為によって、話し手、聞き手の両者にとって何が主題となっているのが明らかになっている。また、説明となる述部は、主題を説明する名詞句である場合だけではなく、話し手が聞き手に対象物を「これからどうして欲しい」のかを説明する場合もある。

- (34) [恋人の行方を捜しに実家を訪れた男に母親が走り書きのメモを渡しなが言う。]

これ (ϕ / ?ハ / *ガ)、あの子が今いるところの住所。 (ビ)

- (35) [贈り物でもらった松坂牛のステーキセットを同僚に差し出しなが言う。]

赤羽さん、悪いけど、これ (ϕ / *ハ / ?ヲ) 貰ってくれない？ (ビ)

「対象物の説明をする文」の場合も「指示詞＋名詞句」以外が主題となることもある。

- (36) [ファミリーレストランから出ると、外は雨だった。店から店員が出てきて傘を客に渡しなが言う。]

どうぞ、傘 (ϕ / *ハ / ?ヲ)、お使いください。 (ビ)

4.2.4.c. 感想・感覚を述べる文

眼前の事象に対する感想・感覚を述べる場合、やはり話し手、聞き手の両者に主題が何であるかが明らかであり、顕在化は必須ではない。そのため、顕在化された主題を表す名詞句に「ハ」を付けることで対比感が生じないよう無助詞が選択される。

- (37) [いきなり泣き出した友人に驚き、自分の汚いタオルを渡した。友人は涙を拭いて言う。]

……この、タオル (ϕ / *ハ / *ガ)、なんか臭い。 (ビ)

- (38) [知り合いの作ってくれた手料理を食べて言う。]

これ (ϕ / *ハ / *ガ)、すごい美味しい。 (継)

「感想・感覚を述べる文」は、「現象について述べる文」「対象物の説明をする文」とは異なり、一見、眼前の事象について述べていないような場合も存在する。つまり、「感想・感覚を述べる文」には、話し手の感想・感覚を持った時と話し手が聞き手にそれを伝

える時との間に時間差が生じることがある。

- (39) 「昔付き合っていた人が恋人といるところを見かけた。しばらくして、彼と二人になってから感想を言う。」

あの人 (ϕ / *ハ / *ガ) かわいい人だね。 (ビ)

しかし、述部が話し手の感想・感覚である場合、その事象に気付いた時点から発話までの間に時間があつたとしても、感想・感覚そのものを持ったのは、話し手が事象に気付いた時点であり、単にその感想・感覚を言語化したのが後になってからだと考えれば、やはり「感想・感覚を述べる文」も、「眼前の事象を述べる文」の一種としてまとめることが可能である。

4.2.5. 現象描写文の疑問文

仁田 (1991:122) は「現象描写文」を次のように定義している。

＜現象描写文＞とは＜述べ立て＞のタイプであり、ある時空の元に生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べ伝えたものである。(中略) 現象描写文は無題文である。(中略) また、文全体が新情報の文である。

更に、仁田 (1991:133) は、現象描写文の疑問文について以下のように述べている。

＜疑問＞と現象描写文との関係について、次のようなことが観察できる。全体が新情報で題目を持たない現象描写文が、何ら前提を有することなく現象描写文のまま疑問化することは通常ないと考えられる。たとえば、

- (91) ?雨が降っていますか。

- (92) ?公害訴訟が終結しましたか。

などは、座りの悪い不自然な文である。(中略) 現象描写文が、現象描写文のまま、何ら前提を有することなく疑問文化することはないと言えよう。現象描写文は、極めて疑問文になりにくい文である。

しかし、無助詞文であれば、次の例のように何の前提もない状態で発せられたとしても、不自然さは生じない。

- (40) 「車の窓から手を出したことを、バイクに乗った男に咎められた女が、言い訳をする。」

雨 (ϕ / *ハ / *ガ) 降ってるかってともだちが言うから。 (ビ)

特に「ある」「いる」で表される存在文は、現象描写文の典型であるが、この存在文の疑問文は、現象描写文の疑問文が無助詞となることを明らかに示している。

- (41) 「恋人 (杏子) の実家を訪ねてきた男が恋人の母親に向かって言う。」

杏子さん (ϕ / *ハ / *ガ)、いますか? (ビ)

- (42) 「夜、小売店のガラス戸が叩かれ、戸を開けると、知り合いの客が言う。」

花火 (ϕ / *ハ / *ガ) ある? (合)

現象描写文という無題文を疑問文にするためには、述部の一部を取り出して主題にする

必要が生じる。しかし、主題に選択された名詞句はもともと無題文の述部の一部でしかなく、「ハ」が付加できるほどの主題性が備わっていない。そのため、「ハ」が付加されると、対比感が生じてしまうため、無助詞が選択されたのだと捉えることができる。

「花火 ϕ ある？」の場合、「花火がある」という現象描写文が疑問文となることで、主題が必要となり、述部から「花火」が主題として選択される。しかし、現象描写文はもともと無題文であるため、述部の一部に過ぎない「花火」という名詞句には「ハ」が付けられるほどの主題性は備わっておらず、「ハ」を付けると対比感が生じる。これを回避するため、無助詞が選択される。

4.2.6. 特別な表現

- (43) [友人から電話で祭りへ一緒に行こうと誘われた。友人宅に着いて言う。]
お電話 (ϕ / *ハ / *ヲ) ありがとう。 (伝) 注8
- (44) [魚料理店で、店員が料理を出しながら言う。]
焼き魚 (ϕ / *ハ / *ヲ)、お待ちどおさまでした。 (ヤ)
- (45) [引越しをしたばかりの友人と電話で話をしていた。電話を切る前に言う。]
後片付け (ϕ / *ハ / *ヲ) がんばって。 (伝)

「特別な表現」とは、あいさつ表現や慣用的表現としてまとめることができる表現である。これらが、無助詞文となるのは、述部の独立性が高く、主題を要求しないため、敢えて付け加えられた主題に「ハ」を付加すると対比感が生じてしまうためである。

4.2.7. 文単位での分類のまとめ

無助詞文を文単位から6種に分類した。しかし、無助詞文はこの6種に完全に分類できるのではなく、それぞれが互いに関わり合っているような場合もある。

- (26) [美容師がカットモデルの髪を切った後、別れ際に尋ねる。]
俺 (ϕ / *ハ / *ガ)、才能 (ϕ / *ハ / *ガ) あるかな。 (ビ)

「俺+ ϕ 」となるのは、話し手が主題であるからである。また、「才能+ ϕ 」となるのはこの文が「聞き手のことを尋ねる疑問文」であり、「俺」「才能」の両方を主題とするために、述語に近い位置にある「才能」への対比感を回避するためである。

また、6分類のうち、複数の種類にの該当する文も存在する。

- (27) [公園で遊んでいた子供に、ゴムを見せながら泉水が言う。]
これ (ϕ / *ハ / *ヲ)、知ってる？ (リ)

「これ、知ってる？」という文は、「聞き手のことを尋ねる文」でもあるが、「目の前の事象について述べる文」でもある。つまり、顕在化していない「あなた」と「これ」の両方を主題とするために、対比感の生じやすい「これ」に無助詞が選択されているのだと解釈することも、聞き手にとって眼前にあるゴムが主題となることは明らかであり、顕在化する必要のない「これ」を敢えて言語化し、「ハ」を付けると対比感を生じるため、無助詞が選択されたのだと解釈することも可能である。

4.3. 談話単位からの分類（新しい話題の新規導入文）

以上、提出した6種の分類のほか、無助詞が選択される条件がもう一つ考えられる。無助詞文は、談話の始めや談話の途中で話題を切り替える場合、つまり、新しい話題が新規に導入される場合に用いられる。本稿がここで示す話題とは、話し手の交代も含む二文以上、つまり談話における陳述の対象である。新しい話題の新規導入文が無助詞となることには、先行談話によって前提が作られると、「ハ」が許容されやすくなることと関係している。つまり、まったく何の前提も存在しない状態であり、新たに話題として主題を導入していることのマーカーとして、対比感を表さない無助詞が選択されるのである。

- (28) 場面 ゴミ処理場建設に反対した小さな村が、弁護士を雇って裁判を起こすことになった。弁護士は村長の自宅で寝泊りしている。弁護士は仲間三人と裁判について話し合っている。そこに村長の娘が顔を出し、談話が始まる。

登場人物 S：村長の娘

N：村に雇われた弁護士

文番号	話し手	シナリオ	話題を明示した文
1	S	お風呂φ、沸いてますから。	お風呂は沸いています。
2	N	あ、どうもありがとうございます。	お風呂を用意、ありがとうございます。
3	S	作戦会議φ、進んですか？	(裁判の) 作戦会議は進んでいますか。
4	N	もうバッチリねバッチリ。	(裁判の) 作戦会議はバッチリだ。
5	S	勝てそう？	裁判は勝てそうですか。
6	N	勝ちますとも。	裁判には勝ちます。
7	S	難しいことは分かんないけど、なんでも力になりますから。	裁判の難しいことは分からないけれど、なんでも力になります。
8	N	じゃあ、とりあえず、ビールφ、もう一本。	じゃあ、とりあえず、ビールをもう一本くれ。

話題は1S「お風呂」、3S「作戦会議」、8N「ビール」と変わっていることが分かる。これらの名詞句には意味のつながりがなく、新しい話題として導入されたと考えることができる。

- (29) 場面 単身赴任で海外に行っていた父親が帰国した。娘は姉に預けていたが、昨日再会をしている。姉から娘がいなくなったと電話があり、帰宅したところから談話が始まる。

登場人物 Y：単身赴任を終え、帰国したばかりの「ひとみ」の父親。

R：Yの姉。「ひとみ」を預かっている。

文番号	話し手	シナリオ	話題を明示した文
1	Y	ひとみがいなくなったって どういうことだよ!?	ひとみがいなくなったって どういうことだ。
2	R	昨日どうだったの、6年ぶりに父娘 対面φ。	6年ぶりの父娘対面は、どうだった。
3	Y	心当たりは!?	ひとみがいなくなったことの心当たりはあるか。
4	R	まったく、相変わらず人の話φ聞かないね!	相変わらず、人の話は聞かないね。
5	Y	……	
6	R	大きくなったでしょ。	ひとみは大きくなったでしょう。
7	Y	……ああ	ひとみは大きくなった。
8	R	玲子さんの話φ、した?	玲子さんの話はしたか。
9	Y	……いや。	玲子さんの話はしていない。

1Y～3Yでは、YとRで話題が噛み合っていないことが、4Rの発話から分かる。2Rは、1Yの提示する「ひとみがいなくなったこと」を無視して、「父娘対面」を新しい話題として導入している。4Rがこの話題を続けなかったため、5Yは「人の話」へと更に話題を切り替えている。また、8Rで「玲子さんの話」へと話題の切り替えが行われている。

談話は、話題が少しずつ変容しながら、展開される。しかし、談話の途中で先行する談話とは関係のない新しい話題に切り替わることがある。本稿はこの新しい話題が提示される文を「新しい話題の新規導入」と呼ぶ。これは、(28) (29) で示したように、無助詞文で提示されるが、無助詞が選択されるのは、無助詞に先行談話とは関係せず、何の前提もないことを示すマーカーの働きがあるからだと考える。

5. 無助詞文の段階性

本稿が提案する無助詞の分類とは、「1. 聞き手の情報を求める文」「2. 聞き手への物の要求を表す文」「3. 話し手、聞き手が主題の文」「4. 眼前の事象について述べる文」「5. 現象描写文の疑問文」「6. 特別な表現」の6分類である。

このうち、「1. 聞き手の情報を求める文」「2. 聞き手への物の要求を表す文」は、主題が「聞き手」とであると同時に、「尋ねる対象」または「要求する対象」でもあるため、主題の重複が起こり、述部に近い「尋ねる対象」「要求する対象」に対比感が生じやすく、それを回避するために無助詞が選択される。「3. 話し手、聞き手が主題の文」「4. 眼前の事象について述べる文」は、話し手、聞き手の両者に何が主題であるかが明らかであり、顕在化する必要性のない「話し手」「聞き手」「眼前の事象」を敢えて主題として明示するために、対比感が生じ、それを回避するために無助詞が選択される。「5. 現象描写文の疑問文」は、無題の現象描写文を疑問文にするには、主題が必要となるため、述部から名詞句を選び、主題に立てなければならなくなったが、もともと述部の一部でしかない名詞句

には主題性が備わっておらず、「ハ」を付加すると対比感が生じる。そのため、対比感の回避が必要となり無助詞が選択されたのだと考えることができる。「6. 特別な表現」とは、あいさつ表現や慣用的表現ともいえるものであり、述部自体の独立性が高く主題を必要とせず、敢えて付け加えられた主題に「ハ」を付加すると、やはり対比感が生じるため無助詞が選択される。

また、この6分類の他に、本稿では「新しい話題の新規導入文」という項目を主張した。これは、談話の始めや談話の途中で新しい話題を切り替える場合に出現するもので、この文も無助詞文で提示される。この「新しい話題の新規導入文」が、その他の6種と異なる点は、6種は文単位で出現理由を分析できるのに対し、「新しい話題の新規導入文」は談話単位で分析しなければならないところである。そのため、「新しい話題の新規導入文」を文単位で分析すれば、6種のいずれかに分類可能なこともある。

以上述べてきた「無助詞文の分類」に、「助詞省略の許容範囲」の結果を加えて表にまとめると図1のようになる。

無助詞	文単位						談話単位
	聞き手の情報を求める文	聞き手への要求を表す文	話し手、聞き手が主題の文	眼前の事象について述べる文	現象描写文の疑問文	特別な表現	新しい話題の新規導入文
省略可能	主題		中立		中立		
必須	対比 恒常的な出来事 客観的な事実説明 ハ		排他 例外 連体修飾節 存在の平叙文 ガ		強調 ヲ		

図1 無助詞の段階性

参考文献^{注9}

- 庵 勲雄 (1998) 「名詞句における助詞の有無と名詞句のステータスの相関についての一考察」『言語文化』35、一橋大学語学研究室
- 大谷博美 (1995) 「ハとヲと ϕ を格の助詞の省略」「ハとガと ϕ —ハもガも使えない文」『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』宮島達夫・仁田義雄編、P.62～P.66、P.287～P.295、くろしお出版
- 尾上圭介 (1987) 「主語に「は」も「が」も使えない文について」『国語学』150
- 尾上圭介 (1996) 「主語にハもガも使えない文について」日本認知科学会第13回大会
<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/onoe.html>

- 甲斐ますみ (1991) 「「は」はいかにして省略可能となるか」『日本語・日本文化』17、大阪外国語大学
 影山太郎 (1993) 「非対格性と動詞文類」『文法と語形成』P.42 ~ P.73, ひつじ書房
 加藤重広 (1997) 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27
 金 水敏 (1996) 「歴史的にみた「格助詞」の機能」日本認知科学会第13回大会
<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/kinsui.html>
 楠木徹也 (1992) 「ゼロ格の確立」『日本語教育学会創立30周年・法人設立15周年記念大会予稿集』
 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
 黒木睦子 (1998) 「話しことばに見る助詞の省略」『福岡YWCA日本語教育論文集』福岡YWCA
 鈴木孝明 (2000) 「言語習得における格助詞の省略可能性について」『月刊言語』29-5 大修館書店
 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代 (1999) 『日本語教科書の落とし穴』P.76 ~ P.83, アルク
 筒井通雄 (1984) 「「ハ」の省略」『月刊言語』13-5 大修館書店
 Tsutsui, Michio (1984) "PARTICLE ELLIPSES IN JAPANESE" Thesis (Ph. D.), *University of Illinois at Urbana-Champaign*
 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
 丹羽哲也 (1989) 「無助詞格の機能 主題と格と語順」『国語国文』58-10
 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版
 野村真木夫 (1997) 「きりかえる」『文章・談話のしくみ』佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編、P.97 ~ P.109 おうふう
 長谷川ユリ (1993) 「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80
 樋口 功 (2000) 「現場指示用法の指示詞と無助詞」『日本言語学会第120回大会予稿集』
 Noriko Fujii and Tsuyoshi Ono (2000) "THE OCCURRENCE AND NON-OCCURRENCE OF THE JAPANESE DIRECT OBJECT MARKER O IN CONVERSATION" *Studies in Language* 24: 1
 藤原雅憲 (1991) 「話しことばにおける助詞省略の効果」『日本語教育学会秋季学会研究発表要旨』
 (1992) 「助詞省略の語用論的分析」『日本語論究3』和泉書店
 Kaoru Horie (2000) "CORE-OBLIQUE DISTINCTION AND NOMINALIZER CHOICE IN JAPANESE AND KOREAN" *Studies in Language* 24: 1
 Seiichi Makino and Michio Tsutsui (1986) A DICTIONARY OF BASIC JAPANESE GRAMMER, The Japan Times
 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』くろしお出版
 松下大三郎 (1977) 『増補校訂 標準日本語口語法』勉誠社 (復刊本)
 前田昭彦 (1998) 「日常会話における助詞の省略」『長崎大学留学生センター紀要』6
 丸山直子 (1995) 「話しことばにおける無助詞格成分の格」『軽量国語学』19-8 軽量国語学会
 (1996a) 「話しことばにおける無助詞格成分」日本認知科学会13回大会
<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/maruyama.html>
 (1996b) 「助詞の脱落現象」『月刊言語』25-1
 三上 章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
 三上 章 (1972) 『現代語法序説 シンタクスの試み』くろしお出版 (復刊)
 三上 章 (1972) 『続・現代語法序説 主語廃止論』くろしお出版
 守時なぎさ (1993) 「助詞を省略した文における発話時間とピッチの特徴」『日本語と日本文学』筑波大学国語国文学会
 山田剛一・中川裕志 (1996) 「助詞・無助詞の意味と役割」『情報処理学会第52回全国大会』
 山田剛一・中川裕志 (1996) 「無助詞の意味解析をめざして」『情報処理学会研究報告』96-NL-113

注

注1 ただし、手紙文では無助詞が現れる。

注2 「 ϕ 」の記号は、助詞がないこと、つまり本稿での「無助詞」であることを表す。

注3 ここでは、久野 (1973) に従って「総記」という用語で記述した。これは、三上 (1963)、野田 (1996) の「排他」と同じ原理を表している。

- 注4 ここでは、久野(1973)に従って「対照」という用語で記述した。これは、三上(1963)、野田(1996)の「対比」と同じ原理を表している。
- 注5 シナリオ談話の資料は次の通りである。
 北川悦吏子(2000)『ビューティフルライフ シナリオ』角川書店
 西萩弓絵(2000)『ケイゾク/台本 シーズン壺』角川書店
 野沢 尚(2000)『リミット もしも、わが子が…』中央公論新社
 伴 一彦『ストレートニュース』<http://www.plala.or.jp/ban/sn0101.html>
 三谷幸喜(2000)『合い言葉は勇気』角川書店
 以下、例文には、それぞれ次のような出典記号をつけることにする。
 (ビ) = 『ビューティフルライフ』 (ケ) = 『ケイゾク』 (リ) = 『リミット』
 (ス) = 『ストレートニュース』 (合) = 『合い言葉は勇気』
- 注6 [] には、例文の現れたシナリオの場面を記している。これは、助詞によって変化する文のニュアンスの違いを問題にするには、場面の解説が必要になると判断したためである
- 注7 助詞のない部分は ϕ の記号で示し、「*」は不適當、「?」は文法判断が揺れるものである
- 注8 テレビドラマのシナリオからは、適当な例文が見つからなかったため、以下の日本語教育教材用ビデオのシナリオから例文を探した。
 国立国語研究所(1991)『伝えあうことば 1 シナリオ集』国立国語研究所
 国際交流基金(1984)『ヤンさんと日本人の人々 別冊シナリオ』国際交流基金
 出典記号 (伝) = 『伝えあうことば』 (ヤ) = 『ヤンさんと日本人の人々』
- 注9 「無助詞」に関する活字論文は少ないため、参考文献には学会発表要旨も含める。